

芸大通信

2006年3月発行

Vol.005

京都市立芸術大学広報誌

KCUA NEWS

CONTENTS

京都市立芸術大学

「京都国際会議2006—芸術がデザインする平和のかたち—」開催に当たって

美術学部・〈他者〉に開かれた場所のために

音楽学部・音楽と平和—シンポジウムとコンサート

日本伝統音楽研究センター・平和な日本にもたらされ伝承されている音楽

芸術資料館・芸術資料館収蔵品展「仏画—祈りの図像」について

美術学部・教員の紹介

京都市立芸術大学

「京都国際会議2006－芸術がデザインする平和のかたち－」開催に当たって

京都国際会議2006実行委員会 会長 中西 進



中西 進

本学が2006年10月6日から9日まで、「京都国際会議2006」を開催するに当たって、その趣旨と概要を述べます。

そもそも本学は芸術教育を目的とする大学でありますので、本来国籍などあるはずのない芸術の教育上、日々不断の活動こそが国際的でなければなりません。事実、私どもは世界的普遍を目指して世界を活躍の場としながら、芸術表現を考え、技を磨き、芸術の何たるかを問い続けて、学生の育成に励んでおります。

その点、殊更に国際会議などをするまでもないともいえます。

しかし、ここに国際会議をあえて行おうとする理由は、いま世界的に芸術をもう一度見つめ直す必要があると考えたからであります。

世界情勢は近年とみに緊迫し、中東、アジアにはなお戦火が止みません。つい先年もバーミヤンの仏教遺跡が破壊されたことは耳目に新しいことですし、戦禍は博物館の破壊や所蔵品の散逸にまで及んでいます。文化芸術の最大の敵は戦争であります。

こうした中で芸術が目指す平和の価値を全世界的に認識しなおすことが求められています。この国際会議は、そのような意図によって立案され、そのことから「芸術がデザインする平和のかたち」を主題とすることも決定されました。

会議の総体的な見通しは第1日目のオープニングシンポジウムで示されるでしょう。キーノートスピーチは9・11を主題として小説を書き、本年度大佛次郎賞に輝いたリービ英雄氏が行い、続いて平和と芸術をテーマにパネルディスカッションを催します。

2日目以降は美術、音楽の両学部と日本伝統音楽研究センターとの三つの組織から、それぞれ平和と芸術のテーマを追求します。

美術学部ではイスラエルからミハ・ウルマン氏を招き、本学教員とともにワークショップとシンポジウムを開催します。学生も市民も参加するものです。

音楽学部でもパレスチナ生まれのニザール・ロハナ氏やウクライナのオクサーナ・ステパニク氏、そして本学教員・学生による「愛と平和を祈るコンサート」を行うほか、音楽と平和に関わるシンポジウムを開催します。

日本伝統音楽研究センターも平和によって保存されてきた声明についての講演やアメリカから招くボニー・ウェイド氏の民族音楽に関する講演を計画しています。

最終日には平和と芸術についてのアピールも提唱する予定です。これらによって、本学は崇高な芸術の意義を一層明確にし、これを全世界に訴えたいと考えています。どうか今回の催しの趣旨を御理解いただき、皆様の御参加を御待ちしています。

開催に当たって

京都国際会議2006実行委員会 会長代理
美術学部教授 小清水 漸

■プログラム概要(案)

- 開催日 2006年10月6日(金)～9日(月・祝)
- 開催日程 10月6日(金) オープニング・シンポジウム
午後 基調講演とシンポジウム
夕刻 ウェルカム・パーティ
- 10月7日(土) 日本伝統音楽研究センター
主催セッション
- 午前 田邊コレクション楽器の展示と
音の再現(展示は期間中開催)
- 午後 黄檗山万福寺万福寺声明美演と講演
ボニー・ウェイド(アメリカ民族音楽学
会前会長)講演
- 10月8日(日) 美術学部主催セッション
ミハ・ウルマン ワークショップ(10月5日～7日)
中ハシクシゲ ワークショップ(9月中の約10
日間)期間中は作品展示
ミハ・ウルマンと中ハシクシゲによる公開シン
ポジウム
- 10月8日(日)～9日(月) 音楽学部主催セッション
- 10月8日(日) ニザール・ロハナ アラブのウ
ード音楽によるコンサート
京都市立芸術大学教員・学生コ
ンサート「音楽を通じての平和へ
の祈り」
- 10月9日(月) 「音楽と平和」に関するシンポ
ジウム
- 1) ユン・イサンの生涯と音楽
2) サイドとバレンボイムによるオーケストラ教育
オクサーナ・ステパニウク
ウクライナのバンドウーラによるコンサート
- 10月9日(月) クロージング・デklarレーション
アピール宣言

※「広河隆一 チェルノブイリ写真展」期間中開催
※京都市立芸術大学収蔵資料の展示
※プレコンサート開催(10月1日～5日)
音楽学部学生 二条城(予定) ほか

20世紀は戦争の世紀であった、と振り返ることができます。この百年の間には二つの大きな世界戦争があり、その他にも様々な地域における国家間の争いは、数え切れないほどありました。

一方で20世紀は芸術の変革の世紀であったとも言えます。セザンヌやシェーンベルクの業績の発展的影響を、証左として思い描くだけで充分でしょう。

もちろん芸術が独自に変革してきた訳ではなく、19世紀を引き継ぐ諸科学の深化や社会の活発な動きと、密接な関係を持っていたことは言うまでもありません。

20世紀最後の10年には、世界に緊張をもたらしていた東西の構造的対立が解け、ヨーロッパ連合の拡大も相俟って、次の世紀には地理的・政治的ボーダーに起因する争いは無くなるかに思われました。しかし、見えざるボーダーは人種・民族間や宗教間に潜在し、21世紀を迎えた今も、人々の心と心を隔てています。

人間は長い歴史にわたって芸術を大切にしてきました。それは、芸術が人間の生存にとっての自由を象徴するものであり、喜びをもって豊かに人間を存在させる、重要な方法だったからです。

しかし悲しいことですが、人間の歴史は様々な争いも記録してきました。それゆえに、私たちの芸術による平和への希求は、痛切に心の中に膨らみ続いています。

21世紀を、豊かな人間性と思いやりに満ちた芸術の世紀にしたいという思いは、この平和への願いとともに、広く人々の共有するところでありましょう。

京都市立芸術大学は、創立以来125年の歴史を有する大学です。日本の近代化とほぼ同じ歴史を歩んできました。

千年のみやこ京都が、政治的首都を東京に譲り、芸術を大切にする文化首都として、新しい時代を迎えようとする意志のあらわれの一つが本学でした。ところが衝撃的に始まった21世紀の今ほど、人類が平和を希求した時代は無かったでしょう。世界中の何処にいても、破壊され崩れ落ちるビルの衝撃的な映像を、同時刻に見てしまう今、何ごとも無いかのような日常を見せる街角が、突然戦場に変わる可能性を孕んでいる今。

私たち芸術に携わるものが、なにを残し、なにを伝え、なにを育むべきなのか、問い直し確かめる時が、今ではないかと思えます。

長い時をかけて、人類は芸術の様々なかたちを伝えてきました。音楽というかたち、美術というかたち、文学というかたちなどです。今後、私たちの芸術はどのような平和のかたちを伝えることが出来るでしょう。

その手掛かりを見つけるため、多くの芸術製作者、演奏家、研究者が集い、それぞれの立場から自由に発言し提案し広く意見交換を行える場として、国際会議を開きたいと思えます。

〈他者〉に開かれた場所のために —ミハ・ウルマン氏と中ハシクシゲ氏を中心とする美術学部セッション

京都国際会議2006実行委員会 委員

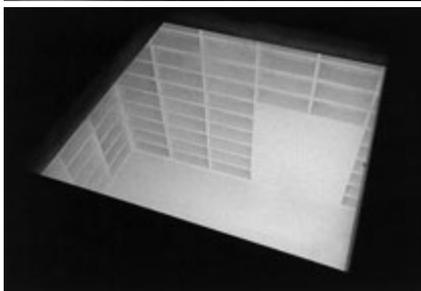
美術学部助教授 小林 信之



中ハシクシゲ
On the Day Project_Runit Dome-1st March, 2004



中ハシクシゲ
ZERO Project #03-09_Seattle, 2002



ミハ・ウルマン
ベルリン市のペーベル広場にナチス政権下で行われた
焚書(1933年5月)を追悼する記念碑《図書室》(1995年)

国際会議2006「芸術がデザインする平和のかたち」開催に当たり、美術学部においては、国際的に活躍するミハ・ウルマン氏と本学教員の中ハシクシゲ氏の両作家を招聘し、両氏のワークショップやシンポジウムを通してヴィジュアル・アートと平和の問題を考えます。

世界は日々、けっして平和とはいえない無数の出来事で満たされています。そのような世界に美術はいかにかかわることができるのでしょうか。政治家や宗教者なら、まず一歩を踏み出し、世界に身を投げ出し、行動に移るでしょう。決断と行動なしに世界が変わることはありません。

しかし美術家がなすのは、さしあたりただ世界を見つめることであり、そこから一本の線、形、色を引き出すことだけです。美術家は、いわばひとり世界と向かいあい、世界に問いかけます。言葉を換えれば、美術は、徹頭徹尾「個」の視点を離れられないということかもしれません。

たとえば戦争という巨大な出来事も、じつは無数の個人的な経験の集積であり、無数の物語、無数の記憶の断片から成り立っています。歴史家はおそらく巨視的な視点から出来事の断片を寄せ集め、客観的な戦争の「真実」を描き出そうとします。それに対して美術家が成し得るのは、ただ、ひたすらミクロの視点に固執することで、細部に宿った神を、ささやかな「声なき声」を、救い出すことだけです。

だとすれば美術の言葉、美術の表現は、単なる問いや無力な嘆きにとどまるのでしょうか。それとも、政治や経済の力とは異なったひとつの力で有り得るのでしょうか。そしてひとつの力で有り得るとすれば、どのような可能性が開かれるのでしょうか。おそらくそれは、「他者」を理解しコミュニケーションを切り開くことにあるのではないかと思います。「他者」とは、個の視点を徹底することで初めて見えてくるような何かでしょう。

国際会議の美術学部セッションにお迎えするミハ・ウルマン氏も、中ハシクシゲ氏も、現代の、ともすれば絶望に閉ざされがちな状況のなかで、和解の困難や不可能や不寛容に直面して、なおかつ語りかけることをやめません。その意味で、彼らの仕事は相互理解を求める人々に常に開かれています。

ミハ・ウルマン氏はイスラエル生まれの第一世代に属し、今も解決をみない中東紛争のただ中でアーティストとして活動を続けています。氏は、ベルリン市のペーベル広場にナチス政権下で行われた焚書(1933年5月)を追悼する記念碑《図書室》(1995年)を制作したことで知られており、かつてそこにあったもの／人について観る者に想像させ、人間同士の対立によって失われたものについて私たちに問いかけます。

中ハシクシゲ氏は、近年核への関心を示しています。2004年夏、「第五福竜丸展示館」で開催された特別展では、被爆に由来する歴史の中から、ある特定の日と場所を選び、日の出から日没まで撮影し続けて出来た5000枚の写真をボランティアとともに張合わせたプロジェクトを展示しました。氏は制作中に出会う様々な人々との交流を織り込んで、記憶を社会へつなごうとするのです。

ウルマン、中ハシの両氏はともに、それぞれの日常から見えにくくなっていったものや事を掘り起こそうと試みます。両氏の作品は、現代において平和を問うことの難しさとともに、平和を希求しかたちづくることの可能性を示しているといえるでしょう。今回のワークショップやシンポジウムにおいても、そうした両氏の在り方が浮き彫りにされるでしょう。

音楽と平和－シンポジウムとコンサート

京都国際会議2006実行委員会 委員
音楽学部教授 龍村 あや子



オクサーナ・ステパニウック氏

国際会議に関し、音楽学部では3つのコンサートと2つのシンポジウムを予定しています。全体の趣旨は次の通り：音楽と平和に関わる様々な問題を、シンポジウムと平和を祈るコンサートを通じて考える。音楽は一方では政治的・社会的に抑圧された人々の抵抗の場であり、民族の自己主張の場であるが、他方では文化の差異や立場を超えて人々を結び付ける力を持つ。音楽はまた、戦争や災害で平和が脅かされたときに、傷ついた人々の心を癒す力も持っている。しかし他方では、音楽が人に与える力が政治的プロパガンダに利用され、戦争への道具となってしまうこともある。音楽はどのようなかたちで平和に寄与することができるのだろうか。

・10月8日(日)午前には愛と平和を祈るコンサート1。「アラブのウード音楽の真髄」と題してパレスチナ人のウード演奏家、ニザール・ロハナ氏によるレクチャー・コンサートを行います。ウードとはヨーロッパのリユートのもとになった楽器で、その音楽は独特の微妙な音程を含む伝統的な旋法を土台に繰り広げられる即興演奏を中心としています(大学講堂)。8日夜には2。「音楽を通じての祈り」と題して、本学教員、学生が心を込めて贈るコンサートを京都コンサートホール(小ホール)で行います。中村典子先生が作られた新曲に始まり、松本日之春先生が広島のために作られた作品、武満徹の《死んだ男の残したもの》など、現代作品を中心としたプログラムです。

・10月9日(月・祝日)には午前(10:00～13:00)と午後(14:00～17:00)、それぞれ異なるテーマでのシンポジウムを行います。午前は〔1〕作曲家・尹伊桑(ユン・イサン)の生涯と音楽と題し、分断された国家の狭間において現代音楽の世界にその名を残したコリア人作曲家の生涯と音楽を振り返ることにより、音楽と平和について考えます。韓流ブームに沸く日本ですが、ペ・ヨンジュンを知っていてもユン・イサンのことを知る日本人は少ないでしょう。尹伊桑(1917-95)は日本占領下の韓国に生まれ、1960年代には韓国の音楽的感性を生かした語法でヨーロッパの現代音楽界に知られる存在となりましたが、67年、当時のKCIAにより西ベルリンからソウルへと拉致され、スパイ容疑で終身刑を宣告されました。この事件は当時、シュトックハウゼンを始めとするヨーロッパの音楽家の大きな憤りと署名運動を呼び起こし、ついに彼は2年後に釈放され、西独の市民権を得て、ベルリン音楽大学教授となり、松下功、細川俊夫、徳山美奈子などの日本人作曲家も育てました。生前には韓国への帰国や故国での作品演奏の機会はありませんでしたが、死後、韓国の民主化と共に歴史の見直しの機運の中で状況は大きく変わり、現在では南・北両方の国で評価される存在となりました。

発表者：徳山美奈子・徳山喜雄・金東珠、コメンテーター：草野妙子。

午後には〔2〕サイドとバレンボイムによる音楽の平和教育と題し、オリエンタリズム研究で知られるE.サイドと指揮者のD.バレンボイムが、ゲーテゆかりの地のワイマールにアラブとユダヤの若い音楽家を集めてオーケストラを形成し、ワークショップを行った活動とその後の展開を振り返ることにより、音楽と平和に関わる、オーケストラを通じての教育の意味と問題点を考えます。この活動は、サイドの亡くなった現在もセベリア近くの村で続けられており、2005年の夏にもバレンボイムの指揮で演奏会が行われました。

発表者：屋山久美子、コメンテーター：白杵陽、ニザール・ロハナ、大嶋義実。

・10月9日(月・祝日)夜には、コンサート3。「ウクライナからの声と響き」と題し、ハーブと似たウクライナの民族楽器、バンドウーラによる弾き歌いのコンサートを催します(大学講堂)。奏者のオクサーナ・ステパニウックさんは、国立ウクライナ・チャイコフスキー音楽院で学んだ有名なアーティスト。このコンサートは、チェルノブイリ子供基金(報道写真家の広河隆一氏が設立。音楽活動を行うことにより、収益金の一部をチェルノブイリの事故により今なお苦しむ被災地の子供たちの救援に当てている)の活動の一貫として行われます。別途、広河隆一氏の写真展「平和が壊されるとき」を予定。なお、10月1日から5日までの間、京都市内の寺院、教会、神社などで、本学大学院生を中心とする「平和を祈るミニ・コンサート」を開催する予定です。

平和な日本にもたらされ伝承されている音楽－萬福寺の声明

京都国際会議2006実行委員会 副会長
日本伝統音楽研究センター所長 吉川 周平



磬子・大引鑿・小大引鑿・小木魚・大木魚(左奥より)

日本伝統音楽研究センターは、京都国際会議2006のセッションのひとつとして、黄檗宗大本山萬福寺の声明（しょうみょう）を上演していただく計画をたてている。声明というのは、仏教の儀式・法要で僧が唱える声楽の総称である。声明は仏像や仏画、建築物などの有形のものとともに、仏教を荘厳する無形の文化財であり、外来の高度な宗教のコスモロジーを構成するのに不可欠なものである。

奈良の東大寺の修二会（お水取り）は、二月堂に僧たちが何日間もお籠もりして行われるが、その時の声明に毎日感動させられた。

黄檗宗は臨済宗、曹洞宗とともに、中国で開かれた禅宗のひとつである。大本山萬福寺の開祖の隠元（1592－1673）は、中国福建省福州の黄檗山萬福寺の住持であったが、度重なる招請によって、1654年に日本に渡来した。皇室、幕府、諸大名等の篤い帰依を受け、当初は数年で帰国するつもりであつたが、幕府から宇治の地を拝領して、中国と同名の寺を開創し、随行の技師たちもいたので、中国の萬福寺と同様の規模、伽藍配置の寺を建立した。

私は京都在住4年だが、機会を得ず萬福寺には参ったことがない。私は芸能のフィールドワークで、日本の各地に行くばかりではなく、中国にも行く。洛陽で後漢の明帝が建立した中国最初の寺である白馬寺や龍門の石窟を見たあと、河南省を南下して、平頂山市の宝豊県に馬街書会というお祭りを見に行つた。そこは曲芸（中国の曲芸は歌や漫才や講談などを含む）の里ともいわれる農村で、麦畑に曲芸の芸人が千人あまりやってきて、10万人あまりの観客が取り囲んで楽しむ。そのとき招かれた家で、日本軍がしたことをいろいろと聞かされたが、日本は好戦国だと思われている。雲南省の昆明に行つた時も、博物館に日本軍の武器が展示されていた。しかし、私は六代目尾上菊五郎（1885－1949）が鼯鼠に配った手拭が置かれているのを見たとき、それを持ってきた軍人は好戦的な人間ではないと、中国人に話したものである。

中国の王朝交替時期には、戦渦に巻き込まれて、人命や文化財が数多く失われてしまう。隠元が来日した時期は、漢族による明王朝（1368－1644）が、女真族による清王朝（1616－1912）に滅ぼされた直後に当たっている。

宋（960－1279）と元（1271－1368）の交替期にも中国から禅宗の優れた僧が何人も来日している。

萬福寺の声明は、長く平和が続いた日本だから、隠元だけではなく数多くの中国人がもたらしたもので、本国では失われたものが日本で大事に伝承されているひとつの事例である。唐音（とういん）という明代の発音で歌われる歌がほとんどだが、萬福寺の梵唄（ぼんばい）といわれる声明は、多くの楽器を用いる特色ある音楽で、アレックス・カー氏は国立劇場第41回声明公演プログラム「黄檗宗大本山萬福寺の梵唄」に「明の余韻」という文章を寄せて、「日本の一番美しい音楽と感じた」と述べているのである。

芸術資料館収蔵品展「仏画－祈りの図像」について

芸術資料館 松尾 芳樹



「如意輪観音像」(鎌倉時代)

芸術資料館の秋の収蔵品展では、国際会議の「平和と芸術」というテーマにちなみ、10月3日から11月5日まで「仏画－祈りの図像」展を開催する。こころの平和にスポットをあて、信仰の絵画としてなじみの深い仏画を選んだ。

平和は、失われたときほど、強く意識される。身分の貴賤にかかわらず、意のままにならない人生に対し、多くの人が悩み、苦しんだ果て、祈りによって平安を求めようとした。その契機のひとつが仏画である。

会場には中世の仏画や、古画の模本、図像とよばれる白描絵画に、版本が展示される。まず、眼を向けたいのは、中世の「両部曼荼羅図」である。空海が日本に請来した両部曼荼羅は、真言密教の思想を絵画化しており、さまざまな形式、大きさと描き伝えられ、修法に用いられた。積極的な祈りである祈祷は、「如意輪観音像」や「不動明王像」など個別の尊像に対しても行われるが、息災・増益・敬愛・調伏といったその目的は、心の平安の複雑さも教えてくれる。

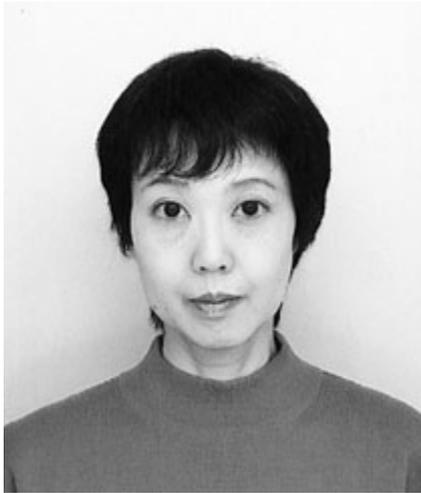
そして、来世の平安を祈願する者は、浄土の姿にあこがれた。だから、「当麻曼荼羅図」のようにその具現を試みるとともに、来迎という往生の瞬間を描いて、確かなものにしようとするのである。国宝として有名な高野山の「阿弥陀聖衆来迎図」は、その中でも荘厳なものとして知られるが、展示の模本は、入江波光らが明治44年頃、東京国立博物館が所蔵する本田天城らの模本から写している。

また、本館の所蔵するコレクションのひとつとして近年注目される六角堂能満院旧蔵の仏画粉本からも、白描仏画と版本を展示する。六角堂能満院というのは、京都市中京区にある頂法寺境内に幕末まで存続した寺で、嘉永4年頃から、仏画の制作や出版活動を行った。この活動を主宰したのは、同寺の住職となった大願憲海で、彼は若年より畿内を行脚して、儀軌に基づく正しい図像を探し求めた律僧である。展示される「孔雀明王像」は、京都の智積院が所蔵する中世絵画の模本で、後にそのまま大型の木版に仕立てられた。

実際、版画という技法は多数の尊像を容易に造り出すことができるため、近世では庶民の信仰と切り離せない役割を持っていた。それはたよりない、墨刷りの紙片にすぎないが、庶民の祈りのよすがとなるには十分だったのである。能満院が所蔵した各地の御影類も併せて紹介し、庶民信仰のありさまもご覧いただきたい。仏画は、形式化した祈りともいえる。

小さな展示室だが、仏画世界の豊かさに触れていただければ幸いである。

教員の紹介



吉田 雅子

2005年4月から京芸で、染織の歴史を中心に工芸・デザイン関係の講義を担当しています。織物の組織構造や文様を調べながら、大航海時代における中国・日本・欧州の交流関係を探ってきました。京芸の背後には、西陣が控えています。京都の中に入って行くのは困難であることは十分承知していますが、これからは産地に継承されている伝統的技術を少しずつ吸収して行きたいと願っています。

アメリカの美術館で4年働き、中国で1年研究し、東京の美大で教えていた私にとって、京都は新たな外国です。京芸の学生は敏感な心を持ち、たいへん実直で、深く思考しようとしています。でも、自分の感情を表情に出すことは洗練された行為ではないという、暗黙の了解があるように思います。なかなかアクションを示さない彼らですが、アメリカや東京の学生とは一味違う、真摯な眼差しをもって、逆に彼らに教えられることの多い一年でした。

あふれかえる情報の中を泳ぎながら生きて行く東京の学生に比べ、京芸には深く静かに思考する独特な環境があります。彼らはこの静かな流れの中に身を横たえる、いわば宝石の原石です。この原石たちが清流の中でゆっくりと輝きを増し、やがて世界の様々な場所でその光を放つように、微力ではありますが陰ながら応援してゆきたいと思います。

(美術学部講師 吉田 雅子)



渡辺 信明

「京芸ライフ」

1982年、当時入学した芸大は移転後まもない頃で、キャンパスにはまだ学生会館もなくそこには芝生広場と植林された竹が少々、まる池にはなぜかよく学生たちが放り込まれ？そうしたほのぼのとした風景が広がっていました。

浪人してようやく入った芸大、さあ思いっきり絵を描くぞ～と思っていたのも束の間、2回生になったとたん突然降ってきたのが移転後初の四芸祭京都大会、その委員長のお役目でした。慣れない裏方仕事に戸惑い忙殺される日々に、こんなはずじゃなかったと嘆きつつも怒濤のように過ぎて行った私の京芸ライフ。しかし今振り返れば結構すべてを楽しんでいたように思え、とても懐かしい思い出のひとつです。

今年春より縁あって母校に油画の教員として帰って来ることになり、学生だったあの頃にタイムスリップしたような、少々気恥ずかしさもありの日々を過ごしています。現役の学生とは長い間の隔絶の感があるかなと思っていましたが案外そうでもなく、“良き同志”といった感じでしょうか。こうしてまた新たにスタートした私の京芸ライフではありますが、皆さんとご一緒できることの意味をこれからも大切にしていきたいと思っています。

(美術学部講師 渡辺 信明)